慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	越南志士の書翰三通
Sub Title	Three letters written by Vietnamese patriots
Author	竹田, 龍児(Takeda, Ryuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1975
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.3 (1975. 2) ,p.117(341)- 125(349)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19750200-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

越南志士の書翰三通

竹田竜児

こゝに紹介する三通の書翰は、越南の志士として有名な潘佩珠と留学生阮典のそれで、何れも早稲田大学の小川博氏が本年八月二十七日に成田山史料館所蔵の柏原文太郎氏関係文書中から発見されたものである。小川氏はそのコピーをわざわざ本塾の研究室に持参せられ、松本信広名誉教授に対してこれを自由に使用して差支えない旨を申し出られたのである。我々はこゝに同氏の御厚意に対して衷心より感謝の意を表する次第である。

潘佩珠の書翰は、従来続対支回顧録（下巻六六六―六六八頁）に引用されている柏原氏宛の三通が知られていたに過ぎない。同書の著者によれば「君（柏原氏）の家に遺存するものは尚ほ数十通を算ふるに余りあるが」云々とあって、柏原家にはなお相当数の潘氏の書翰が残っていることになっているが、今回発見されたのは僅かに二通に過ぎない。

柏原文太郎氏と越南志士らとの関係については続対支回顧録の下巻に詳しい記述があるからそれに譲って、こゝには同氏の略歴を記すに止めたい。

柏原氏は明治二年一月十八日千葉県成田町に生る。二十六年東京専門学校（早稲田大学の前身）政治科を卒業。二十九年に母校の講師兼舎監となり、支那研究会を組織して東亜に関する研究に着手する一方、大隈、犬養、高田諸氏の紹介で近衛霞山公を知り、やがてその知遇を受ける。三十年十二月に、氏が前年結成した東亜会と、近衛公を中心に組織されていた同文会を合併して、新に東亜同文会を結成し、近衛公が会長となり柏原氏は会の経理を担当す。爾来三十年の永きに

わたりアジア諸国との友好のために尽瘁し、外国人留学生を受入れるために大同高等学校、清華学校、東京同文書院などを設立して育英事業に精魂を傾ける。大正元年千葉県より衆議院議員選挙に立候補して当選、爾来十年間国民党の闘士として国政に参与す。昭和十一年八月十五日郷里に於て病歿。六十八歳。

その一

東畝先生閣下　鑒、拝啓者、久違芝宇、渇仰何極、挙頭紅日、遙惟昌熾升恒是禱、僕自離神島、倏忽六年、憶前三載寓暹京、有奉上一函、并寄呈聯亜蒭言一集、（此集弟著於暹京被旅暹日本人所賞携去数百本北京順天時報亦將全文登於報上）不知能否蒙覧、嗣因中華革命、敝国人士、頗思奮興僕時離暹回華、潜栖広東、有所謀画、徒以声跡不密、為仇探偵知、控於粤官、要求引渡、遂被拘禁、経二年余、束身囹圄、音問隔絶、時欲奉函請教、苦無鯉腹之便、近因敝兄弟由東回粤、呉城識剣、胡鴈伝書、藉知　先生近状欣慰万万、夫以侠懐薄群俗、豪気呑五洲、起既死之人而生之、而不言徳、延将滅之種而存之、而不計功、此事此心此人、竊恐現今、無其倫比、僕与敝同志等、所朝夕禱祝於先生者、豈尋常庸俗之思想然哉、惟僕等不敢以尋常思想期許於　先生、正惟　先生亦必不以尋常思想責望於僕等、若使僕等志行薄劣、精神頽喪、坐看敝国、終焉沈淪、則是既無以対　先生、亦当不歯於人類、興念知己、憂与慙并、悠悠蒼天、曷其有極、想賢哲高明、必能察亡人之衷曲也、再有不能已於感激者、敝子弟童生等、恵労教育、恩兼父師、又蒙　賢夫人、撫之如子、尤為不世之隆誼、以天帝之霊貺、人道主義、有発達円満之一時、若　先生与　賢夫人者、必不僅僕等与敝国人之崇拝馨香之已也、別久念深、意長語短、痛飲歓敍、期於異時、粛此代面、并寄声請　根津一先生　恒屋盛服先生諸侠友近佳、恭頌　徳安

陽暦丙辰年六月初一日

越南潘是漢頓首

東畝先生閣下　拝啓　久しく芝宇に違い渇仰何ぞ極らん。挙頭紅日、遙かにただ昌熾升恒を是れ禱る。僕神島を離れてより倏忽六年なり。[2]憶う前三載暹京に寓せしとき、[3]一函を奉上し、并せて聯亜葯言一集[4]（此集は弟暹京にて著す、暹に旅せる日本人の賞するところとなり、数百本を携へ去る。北京の順天時報もまた全文を報上に登す。）[5]を寄呈する有りしも、能く覧を蒙りしや否やを知らず。

嗣いで中華革命[6]に因り、敝国人士、頗る奮興を思う。僕時に暹を離れて華に回り、広東に潜栖し謀画するところありしも徒らに声跡密ならざりしを以て、仇探の偵知するところとなり粤官に控せらる。引渡し[7]を要求せしも遂に拘禁せられて二年余[8]を経たり。身は囹圄に束されて音問隔絶し、時に函を奉じて教を請はんと欲するも鯉腹の便[9]なきに苦しむ。近ごろ敝兄弟東より粤に回り、呉城剣を識り、胡鴈書[10]を伝え、藉りて先生の近状を知り欣慰すること万々なり。夫れ侠懐を以て群俗を薄んじ、豪気は五洲を呑み、既に死せるの人を起して之を生かし、しかも徳を言はず、まさに滅びんとするの種を延きて之を存し、しかも功を計らず。この事、この心、この人、竊かにおもんみるに恐らくは現今其の倫比無からん。僕と敝同志ら朝夕先生に禱祝する所は豈尋常庸俗の思想もて然らんや、惟うに僕らは敢て尋常の思想を以て先生に期許せず、正に惟う先生もまた必ずや尋常の思想を以て僕等に責望せられざらん。もし僕らをして志行薄劣、精神頽喪、坐して敝国の終焉沉淪するを看せしむるならば、則ち是れ既に以て先生に対うるなく、またまさに人類に歯せられざらん。知己を興念して憂と慙と并す。悠々たる蒼天なんぞ其れ極まりあらん。賢哲高明、必ず能く亡人の衷曲を察せられんことを想うや、再び感激已む能はざるものあり。敝子弟童生ら、教育を恵労せられ、恩は父師を兼ね、また賢夫人の之を撫すること子の如き[11]を蒙るは、尤も不世の隆誼たり。天帝の霊貺を以て人道主義発達円満の一時あり。先生と賢夫人の如きは必ずやひとり僕等と敝国人の崇拝馨香のみにはあらざるなり。別れて久しく念深く、意長くして語短し、痛飲歓敍は異時を期せん。粛みて此を面に代う。并せて寄声して根津一[12]先生恒屋盛服[14]先生諸侠友の近佳を請う、恭みて徳安を頌す。

陽暦丙辰年[14]六月初一日

越南潘是漢頓首

解　説

六年の久しきにわたって心ならずも無沙汰に打ち過ぎたことを詫びてその理由を述べた後、柏原氏夫妻の彼らに対する慈愛に満ちた庇護を感謝し、今後決して期待を裏切ることのないように努力する旨を誓ったものである。この書によっても我々は潘佩珠の誠実な人柄と漢学の素養の程を知ることが出来る。

註

（1）挙頭紅日なる語の意味は不明だが、続対支回顧録（下、六六七頁）に見える潘氏の書翰に「惟東望富士山寄遠懐耳」とあるところから「頭を挙げて東の空に旭日を仰ぐとき」という風に解釈してみたが、この類推は如何であろうか。

（2）日本を離れてはや六年とあるのは、彼が一九一〇年（明治四十三年）三月に上海から日本に潜入し、一ケ月ばかり滞在しただけで再び上海に去った時から起算してのことである。

（3）彼がバンコクに居たのは一九一一年二月から翌年一月までで、その後再びバンコクを訪れたらしい形跡はないから、恐らくは思い違いであろう。

（4）本書については、川本邦衛教授の「潘佩珠著作解題」（ヴェトナム亡国史他、二八五頁）に「一〇〇〇部印刷し、バンコク在住の日本人間に好評を博し、うち三〇〇部が日本人によってまとめて買い上げられた」と記されている。

（5）順天時報は一九〇一年に東亜同文会の中島真雄によって創刊された中国語の日刊紙で、一九三〇年に廃刊となった。これに関しては「近代日本と中国」上（朝日新聞社刊）と中下正治「日本人経営新聞小史」（現代中国五十二号、一九七四年十一月）を参照されたい。

（6）辛亥革命を指す、彼は翌一九一二年一月広東に赴き、越南光復会を発足させた。

（7）仏印当局は潘佩珠の引渡しを要求したが、竜済光が雲南の蔡鍔を討つため雲南鉄道を利用したい旨を申し入れたが、フランス側に拒絶されたため、竜も潘の引渡しを断り、潘を広東に抑留したのである。

(8) 広東において拘禁されていたのは一九一四年一月から三年間で、その間に獄中記を脱稿している。

(9) 鯉の腹の中から白絹に書いた書状が出てきたという故事を指す。(古楽府の飲馬長城窟行)

(10) 延陵の季札として知られている春秋時代の呉の王子季札の挂剣の故事に基く。(史記呉太伯世家)胡鴈云々は有名な蘇武の故事。(漢書、蘇武伝)

(11) 東亜先覚志士記伝(中)によれば『最初から彼らの後援に尽力せる柏原文太郎は数名の年少学生を自宅に引取って自家の子弟の如くいつくしみ、それらの者をして柏原夫妻を「お父さん」「お母さん」と呼ばしむるまで親身になって世話をしたのである。』(八二一頁)とあって、如何に彼がベトナム留学生達から敬慕されていたかゞ知られる。

(12) 万延元年(一八六〇)五月二日山梨県東山梨郡日川村に生る。明治十六年陸軍士官学校卒業、十八年陸大に入学したが間もなく教官メッケルと衝突して諭旨退学。二十三年中国に渡り漢口の楽善堂と上海の日清貿易研究所の経営に力を尽し、卒業生八十九名を世に送ったが、二十六年閉鎖。日清の国交急を告げるに及び参謀本部勤務を命ぜられ、上海にあって情報の蒐集に当る。三十四年上海東亜同文書院が開校されるや院長に就任し、爾来二十年間ひたすら人材の育成に力む。昭和二年二月十八日桃山において逝去。六十八才。荒尾精、頭山満、宮島大八の諸氏らと親交があった。同氏の事蹟は山州根津先生伝、対支回顧録(下巻、五五四―五六一頁)、東亜先覚志士記伝(下巻、三二八―三三二頁)、石川順「砂漠に咲く花」(七四―八三頁)などに詳しく記されている。ついて覧られたい。

(13) 安政二年九月十三日福島県白河に生る。明治十三年上京して興亜会附属の支那語学校で中国語を学び、のちまた朝鮮語を修めた。日清戦争が起るや、亡命中の朴泳孝らと朝鮮に渡り内政改革のために尽すところがあったが、施策がいさゝか過激に失したゝめついに帰国のやむなきに至った。帰国後東亜同文会の幹事となり、対露強硬論を唱えた。明治四十二年七月十九日病歿。白頭山未来記、南韓農事殖民地設置意見などの著述があるときく。(対支回顧録、下、五一九―五二一頁。東亜先覚志士記伝、下、三二四―三二五頁)

(14) 陽暦丙辰年は一九一六年(大正五年)に相当する。封筒を欠いているが、発信地は広東であろう。

その二

東畝先生閣下　敬啓者。接奉恵翰。敬悉　尊宅。禧慶独豊。震災之中。天眷殊厚。謹額手為故人賀也。頃因林先生此

次南回。惨遭失敗。倉皇避難。暫来杭州。旋因仏探偵知。遂生種種困難。万不得已。計即東渡。暫避敵人耳目。再図活動之策。竊想　先生義気深重。樹徳務滋。必能不辞艱難。恵加手援。有以成林先生之志也。臨書感激。無限神馳。再附呈　木堂先生一函。并煩　覧正。乞即委人送呈為感。粛此恭請　大安

十二月　日

弟潘是漢頓首

東畝先生閣下　敬啓　恵翰を接奉し敬みて尊宅の禧慶独り豊かなるを悉せり。震災(1)の中、天眷殊に厚し。謹みて額手して故人のために賀す。頃林先生(2)の此次の南回、惨めなる失敗に遭いたるに因り、倉皇として難を避け暫く杭州に来る。やがて仏探の偵知に因りついに種々の困難を生じ万やむを得ず、即ち東渡して暫く敵人の耳目を避け、再び活動の策を図らんと計る。竊かに想うに先生は義気深重、徳を樹つること滋つとめ、必ずよく艱難を辞せず、手援を恵加して以て林先生の志を成さんとするあるなり。書に臨みて感激し限りなく神馳す。また木堂先生(3)に一函を附呈したれば并せて覧正を煩はす。乞う即ち人に委して送呈せば感となす。粛みてこゝに恭しく大安を請う。

十二月　日(4)

弟潘是漢頓首

解　説

本状は柏原氏からの激励の手紙に対する礼を述べ、更に彊樾の再度の渡日について同氏に配慮を請うたものであるが、一九二三年頃彊樾が日本を離れていたという事実は従来知られていなかったように思われる。しかも事志と違い惨めな失敗に終ったというのは如何なる計画であったのか不明である。

註

（1）震災の見舞が述べられているところからこれが大正十二年に書かれたものであることが判る。

（2）林先生とは、彼らが盟主として推戴していた畿外侯彊**樞**（中国名林徳順）に他ならない。ちなみに彼は後年南一雄なる日本名を名乗っていたことを附記して置く。

（3）木堂先生は言うまでもなく犬養毅のことで、潘佩珠が木堂を知ったのはさきに述べた如く梁啓超の紹介によるものであって、犬養が物心両面において越南志士達を援助していたことは人のよく知るところである。

（4）日付は消印によって一九二三年（大正十二年）十二月であることが知られる。なお東京局の消印は十三年一月十二日とあって、受取ったのは翌年正月であった。なお封書には中華浙江杭州軍事編輯処張雲翼ヨリと記している。張雲翼は実在の人物なのか架空の人物なのか全く不明であり、潘が時折この偽名を用いていたかどうかも詳かでない。

その三

柏原文太郎先生賜鑒　敬啓者
生已得潘君伯玉寄銭来已回上
海将帰安南生之此行実出於不
得已蓋生在日本天気太寒喘息
屢発半月学習半月病休其収
効為甚遅何以副貴諸先生裁
成之厚意何以孚敝諸同志嘱望
之深心且学費今日有明日無多費
憂慮所以帰国少為修習以施於
実行亦無悖出洋留学之初志
多年以来蒙
先生種種周旋其義俠之多実
非詞筆所能罄其感謝生唯倍加
策励以少無負諸先生之恩耳希
惟
察諒勿怒為禱
生所寄在先生処之物生已取携去諸
所存者皆為無要然万一生行有
砠礙生当再来貴国則必為有用
故敢祈

先生告諸婢僕為之暫留幸勿投
棄為望特此鳴謝即祝
鈞安

十月九日　　阮典頓

柏原文太郎先生　敬啓　生すでに潘君伯玉[1]の寄銭を得たり、すでに上海に回りまさに安南に帰らんとす、生の此行は実に已むを得ざるに出づ。蓋し生日本にありて、天気太だ寒く、喘息屢々発し、半月学習し半月病休し、其の効を収むる甚だ遅く何を以て貴諸先生の裁成の厚意に副ひ、何を以て敝諸同志の嘱望の深心を孚せん。且つ学費今日有るも明日無く憂慮を費すこと多く、帰国する所以なり。修習を為すこと少くして以て実行に施すも亦出洋留学の初志に悖るなし。多年以来先生の種々の周旋を蒙り、其の義侠の多き実に詞筆のよく其の感謝をつくす所に非ず。生は唯策励を倍加し、以て少しも諸先生の恩に負くことなからんのみ。希くはただ察諒し怒る勿らんことを禱となす。生先生の処に寄在するところの物は生すでに取りて携去せり。諸の存する所の者はみな無要たり。然れども万一、生の行沮礙あらば、生まさに貴国に再来すべければ、則ち必ず有用たり。故に敢て先生諸婢僕に告げ、之が暫留をなすを祈る。幸に投棄するなからんことを望となす。特にこゝに鳴謝す。即ち鈞安を祝す。

十月九日[2]　　阮典頓

解　説

差出人たる阮典に関して獄中記の癸卯（一九〇三年、明治三六年）八月の条に潘佩珠が阮蘧と阮典を伴ってはじめて黄花探将軍を訪ねたことが記されている。阮典がいつ日本へ来たかは明かでないが、一九〇六年（明治三九年）正月に振武学校長福島安正氏に頼んで陳有功、梁立巌、阮典の三人を同校へ入学させたことが獄中記に見えている。なおこの振武学

校は明治三六年に参謀本部が設立した学校で言わば陸軍士官学校入学志望者のための予備校とも言うべきものであった。

註

(1) 獄中記によれば潘伯玉は潘廷逢の長子ですでに今世紀の初めから故国に於て潘佩珠の同志として活躍していた人である。いつ来日し、いつ帰国したか詳でない。帰国後転向して親仏的になったとして光復会の人々から越奸と目され、一九二二年二月杭州において暗殺された。

(2) 封筒の宛先きは小石川表町一〇九番地とあり、裏面には由上海発とのみ記している、東京局の消印は一九二一年十月十八日となっている。すなわち大正十年のことで、彼の帰国後の動静も遺憾ながら不明である。

執筆者紹介

三橋冨治男　千葉大学人文学部教授
尾崎　康　慶応義塾大学附属斯道文庫助教授
黒田寿郎　同　言語文化研究所助教授
家島彦一　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手　文学博士
佐藤茂教　日本大学・大学院文学研究科博士課程
竹田龍児　慶応義塾大学名誉教授